HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	陶淵明の隠逸詩とその思想［全文の要約］
Author(s)	熊, 征
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15526号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89387
Type	doctoral thesis
File Information	Zheng_Xiong_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　熊　征

学位論文題名
陶淵明の隱逸詩とその思想

本研究では、主に中國六朝時代の詩人である陶淵明（三六五？～四二七）について、その隱逸詩と思想について考察した。具体的には陶淵明の隱逸思想の根源、隱逸詩人として、その氣質における獨特性、文學作品として六朝期におけるその隱逸詩の評價、隱逸詩の表現上の独特性という五つのテーマをめぐって五章にわけて考察を行った。

まず、第一章では、先行研究においてすでに指摘された、陶淵明の隱逸初期が孔子の主張に従うも、隱逸の深まりに伴って道家などに轉換していくという變遷が生じたことと、その詩文に『列子』楊朱篇と關聯性があることとの二点について、中國の隱逸思想の根源を整理し、儒家、道家の思想を思想學派として總括的に見るだけではなく、儒、道両家の思想家それぞれの隱逸思想の異同に重点をおきながら、陶淵明の隱逸思想の變遷理由をめぐって考察し、道家の隱逸思想における楊朱思想の特殊性を考察した。

その結果、儒家の隱逸思想については、孔子をはじめとする儒家の隱逸思想において、一時的に隱逸し、行動よりも發言における「隱」を重視するという特徴があることこそ、陶淵明のように隱逸初期が孔子の主張に従うも、隱逸の深まりに伴って道家などに轉換していくという變遷が生じる大きな理由となる。

それから、道家思想において、老子の隱逸思想が統治者を對象とするものであり、知識人の隱士からみれば距離感があることや、莊子の説く精神上の「隱」は徹底的で、理想的であるが、實際の隱者にとっては到達しがたい、または現實における實用性が足りないという難しさもある。そこで、楊朱（楊朱學派）の隱逸思想について重點的に考察を行った結果、老・莊とは異なり、楊朱思想ではその「爲我」思想によって、隱逸するかどうかの判斷基準を「我」のためになるかどうかに置かれている。これによって、隱逸自體は個人の境遇、時代の環境によって可變的なものになる。

このような儒家で重視される「時」と、道家で重視される言・行における「自然」、そして精神上の個人の獨立とが融合されているところこそ、隱者とりわけ六朝期の亂世に生きる隱者らにとっては實用性があり、受け入れやすい隱逸思想となった理由だと推測した。

第二章では、陶淵明の隱逸詩における楊朱思想の影響を考察した。第一節では、主に「我」と死・生、名實論と「生」、そして「裸葬」という三つのテーマから、陶淵明の死生觀における楊朱思想の影響を考察した。まず、楊朱篇における死生觀の特徴を確認した結果、『列子』全體や『莊子』と異なり、死と生を明確に區別し、誰もが免れない死を出發點として生を顧みるという思考構造によって、當生を樂しむという特徴がある。次に、陶淵明の死生觀において、死を出發點として生を顧みる姿勢には、漢代の樂府詩の影響が認められる一方で、その「形影神」に見られるように、死の恐怖感を超越し、死と生とを明確に區別し、死と生に對して冷靜な態度をとってい

る點から見れば、楊朱思想を受けている可能性が高いと推測できる。また、この思考構造に基づく彼の名實論にも、楊朱と同じ方向性を持った要素が多く含まれていて、さらに、死によってすべてが消滅するという考えに基づき、「裸葬」を受け入れるも拘らないところも、楊朱の態度に近いということを明らかにした。

第二節では、陶淵明の隱逸生活における楊朱の存在について考察した。まず、陶淵明の隱逸詩の中、直接楊朱の名を擧げた詩において、「楊朱岐路に泣く」というエピソードを踏まえ、人生の道の選擇における愼重な態度を取ることにおいて、陶淵明が楊朱のエピソードに共感しているところが見られる。さらに、楊朱篇と關わりがあると思われる詩文については、史書の故事や人物を使用する際に、思想上、楊朱思想とりわけ楊朱篇の思想に接近した一面が見受けられる。

第三章では、六朝期の隱逸風潮における陶淵明の存在を考察した。主に湛方生と江淹という二人の詩人との比較を通して、陶淵明の隱逸詩人としての氣質の特徵を明らかにした。當時流行した玄學に服膺し、純粹に道家的な「隱」を求める湛方生、そして儒・道・佛を區別せずに受け入れ、「隱」に憧れるも實踐上は控えていた江淹とは異なり、陶淵明は、「隱」と「仕」との閒で徘徊し、死と生、「名」と「實」等々の現實的でもあり哲學的でもある問題に直面し、その隱逸實踐の中で求め續け、その過程を隱逸詩によって表わした。

これらの隱逸詩から、彼には孔子のような「道」を守ろうとしてもうまくいかない中で惱んでいた一面と、楊朱のような「死」の虛無を起點として顧みて、「生」におけるすべてを諦觀したという兩面性がある。このような兩面性は矛盾している一方で、兩者が相補って、陶淵明の隱逸詩人として獨特な氣質を形成させた。これによって、湛方生のようにひたすら玄學や神仙思想に傾倒することもなく、江淹のように仕官の道において隱逸思想を功利的・實用的に使うこともなく、後世において隱逸詩人として長く尊ばれる理由を明らかにした。

第四章では、六朝期における陶淵明評價をめぐって考察した。主に「詩人」としての陶淵明の文學についての評價を重點に、「隱逸」における人物の面も合わせて、六朝期の代表的な文學批評者であり、かつ後世の陶淵明評價に重要な影響を與えている顏延之、江淹、鍾嶸、昭明太子蕭統と簡文帝蕭綱を取りあげてそれぞれの詩文と人物における評價を考察した。六朝期の文學批評のなか、陶淵明はまだ詩人として高く評價されていなかったにもかかわらず、文壇の中心人物に思慕されていたことは事實であることを明らかにした。この事實は唐代以降では廣く受け入れられた。

第五章では、陶淵明の隱逸文學の表現における獨特性について考察した。第一節では、六朝期の詩人である阮籍と陶淵明を取りあげ、二人の詩文における「門」のイメージについて考察した。陶淵明が「門」を通して、人跡のない山林ではなく、人里の田園に隱逸する樂しみと惱みを表わしていた。阮籍のように、陶淵明までの詩人も「門」を個人の世界と社會との閒の境界線としてうたった。ただ、陶淵明になってはじめて、『詩』から由來する「衡門」が帶びる隱逸の意味合いを強調し、「荊扉」「柴門」など類似する意味を持つ語彙に加え、粗末な門で「隱者の住まい」を代表するということを定着化させただけではなく、「閉門」という日常的な行爲にも隱逸の意味合いを付加させた。このように、陶淵明によって、「門」と隱逸とは密接に關連付けられ、後世の詩文における隱逸空閒の構築には深く影響を與えた。

第二節では、陶淵明の詩文における美色の存在について考察を行った。「擬古」其七における惱みを抱く「佳人」、「雜詩」其十二における若くして弱くも困難を乘り越えようとする「柔童子」、そして「閑情賦」における內面の剛と外面の柔を備えた美人について、視點や表現方法において異なる美色についての描き方が見られるが、內面的な感情や品格の超俗性がその重點となるとい

う共通點があることを明らかにした。それに、三つの詩文に使われている「松」「雲」そして「音樂」などのモチーフの考察によって、三首の詩で表わされている美色の超俗性は彼のほかの隱逸詩と共通する面が多いことがわかる。「隱逸詩人」と言われる陶淵明が美色に託している「志」には隱逸への憧れが含まれる可能性が十分にあることを明らかにした。

以上のような、陶淵明が「隱逸詩人」として、その思想と文學に見られる特色は、六朝時代において旣に思想の面、とりわけ思想を自分の隱逸實踐に織り込み、彼獨自の隱逸のシンボル群や隱逸空間における彼獨特な隱者の姿を通して具現化したことによって廣く認められた。人物像として認められた延長線上に、六朝時代ではまだ十分に認められていない文學上の價値は、唐代の詩人による人物上の愛慕で間接的ではあるも傳承され、宋代の詩話や詩論の發展と伴って、その隱逸文學の表現上における價値も認められ、人物の評價と相補って今に至ったのである。

陶淵明の隱逸詩とその思想にある獨特性は、六朝期ではある程度認識されるも高く評價されなかった。しかし唐代以降になると大いに評價、模倣された。さらに、陶淵明の詩文や唐以降の李白、杜甫、白居易などの詩人が陶淵明思慕で作られた詩文によって、日本の隱逸文學・隱逸思想にも影響を與えた。その中には、本研究で論じた楊朱思想の要素、「門」を中心とした隱逸空間、「美色」なども含まれる可能性がある。これについては今後の課題にする豫定である。